

コナラのふるさと

新潟県山野草をたずねる会会長

小日向 孝



新潟県山野草を
たずねる会機関紙
第4号

会員数 76名(12/9現)

事務局
長岡市下条町1406-6
印 刷
(有)佐藤印刷所

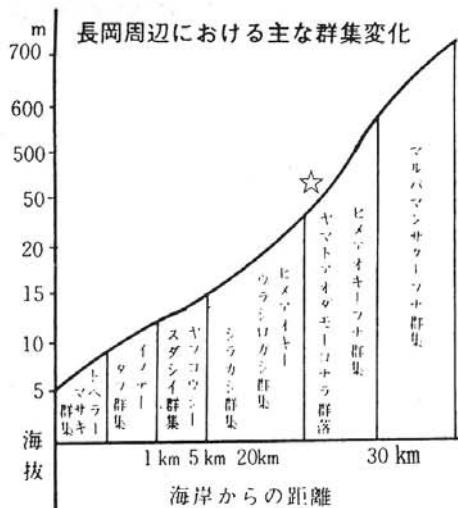
植生は、人などの干渉が加わらない自然植生（一次植生）と人など外からの干渉（植林伐採など）を受けて成立した代償植生（二次植生）に分類されています。コナラは、身近な樹木の一つで以前は薪炭用、家具材用として大いに利用されてきました。コナラ林は、25年～50年に一回伐採が繰り返され、いわば人為的に維持管理されて成立している二次林であるといわれます。

植生は、その社会的秩序（外因的規制）環境規制「気候・土壤・地形・人の干渉など」と内因的規制「社会的規制「競争・共存・我まんなど」）に従って種々な条件の相乗作用の結果として植生現象が存在している訳けです。

ところでコナラは、ブナやカシ・シイなどのようにもともと遺伝的に獲得したふるさと（生活域）はないのでしょうか。

コナラの生活域について、日本の各地で調査された結果を調べてみると、カシとブナの木の生活域の間にコナラの生活域があるのではないかと考えられています。長岡周辺における主な群集変化を示すと下の図のようになります。

人々がより豊かな生活を求め、築くため、農地を広げ自然を破壊しました。コナラ・カシ・ブナは共にブナ科に属します。カシ・ブナの実は低タンニン含有で動物の食料では貴重性は高く、破壊されたカシ・ブナの繁殖力がタンニン含有の多いコナラに対してきわめて弱いのです。そのため、カシとブナの生活域の中間に生活域をもつコナラがカシやブナの生活域まで生活の場を広げているのです。かけがいのない植生のふるさとを大切にし、自然の中の人として生きたいものです。



コナラ林の模式図



'89・夏の植物生態観察

植物群落調査表

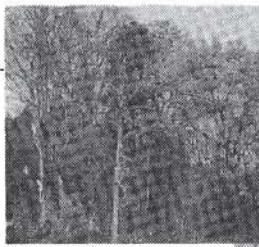
調査地 山野草を訪ねる会

記録者 同上

群落名 ブナ

測定地番 号 長岡市鷺巣町
測定地番 26-98
測定高さ 50 m
測定面積 10 × 40 m
測定範囲 5 m × 95 m
測定範囲 1.5 m × 75 m
測定範囲 5 m × 5 m
測定範囲 50 × 50 m
測定範囲 50 × 50 m
測定範囲 50 × 50 m

Aufn. Nr. _____



方向 北西、面積 (5m²) 出現種数 (77)

B1.2.2ブナ	8.44.ユキツバキ	K.ナスルテ	L.ナマコウシ
1.2.ホウキ	7.2.ヤタコブシ	3.3.ユキツバキ	7.シガシラ
1.1.ズギ	7.2.ミズク	1.アマツイヅル	1.マツノシ
7.2.ミズク	4.4.EXアオキ	1.1.ナゴユリ	1.コマユミ
2.2.コナラ	1.1.ウツミスサクラ	+ コヨウカニアイ	1.ヒメカンスケ
1.1.アオヘダ	1.2.フジ	1.2.ナレコユリ	1.ツリンドウ
1.1.キハダ	1.2.ホウキ	2.2.ヒアキケイ	1.ゼンマイ
1.1.ウツミスサクラ	1.1.ニワトコ	1.2.フジ	1.イボタ
	7.2.イマキササ	1.2.ウツミスサクラ	1.ヤマノイモ
	7.2.コマユミ	1.2.ツルアンドウ	1.イガラミ
B2.2.ホウキ	1.ヤハラメ	1.ツルアンドウ	
1.1.エゴノキ	1.ウハタケエデ	1.ハナドクソウ	
1.1.フジ	1.ガマズミ	1.クマヤナギ	
1.2.コシアブ	1.ヒラサギキナ	1.コマユミ	
1.1.アズキナシ	1.ママモミジ	1.ミツバアケビ	
1.1.ウリハタケエデ	1.エヌズリハ	1.ショウジョウバカマ	
	1.ヤマソソジ	1.ソクウルシ	
	1.ナトリバフ	1.モミシイコ	
	1.シマガマズミ	1.ヒロハスケ	
	1.オバクロモジ	1.タタシオテ	
S.1.ナツツツキ	1.アマツクシ	1.アスカケンケイ	
1.シバミ	1.アズキナシ	1.タネソウ	
1.シイデ	1.オカケメノキ	1.ツルハグマ	
	1.ウツミコロ	1.ブナケイ	
	1.ガマズミ	1.ハイヌガヤ	

平成元年度活動報告

テーマ 植物の生きざまに学ぶ

1. 早春の山野草を訪ねる（スハマソウを訪ねて）
 - 方面 曽地、石地、出雲崎、夏戸城方面
 - 時期 4月2日（日）
2. 春の野を歩き山菜を食べる会
 - 方面 山古志、金倉山
 - 時期 4月29日（土）みどりの日
3. 夏の植物観察会兼植物交換会
 - 方面 長岡市鷺巣町・県環境保全林
 - 時期 6月25日（日）
4. 秋の野に学ぶ会（きのこ同定）
 - 方面 市内大積、赤池
 - 方面 北魚・須原～田子倉
 - 時期 10月10日（火）
 - 時期 10月15日（日）
5. 学び合う会
 - 場所 長岡市内 田村屋
 - 時期 12月9日（土）
 - 内容 ・宮脇先生を囲んでの話
 - 活動の反省（総会を兼ねる）
6. 機関紙の発行 第4号
 - 時期 12月上旬
 - 内容 活動のあしあと、雑感など

定正院緑地環境保全林

長岡市鷺巣の定正院裏にあるブナ林は、低山地域におけるブナ林とし、新潟県自然環境保全林に指定されている。

成種が主である。この二群集の構成は、従つて出現する種

オキノブナ群集のオキノブナとヒメアガシ群集のヒメアガシ。

本地域は、ヒメアガシ群集とヒメアガシ混合域である。

定正院緑地環境保全地域



美しい自然 大切な自然を永く子孫に伝えよう

昭和63年3月1日 新潟県 長岡市

早春の山野草を訪ねて…(夏戸小学校グラウンドにて)

たくさんのきのこに出会った秋の山

(採集された主なきのこ) 10/10赤池、10/15広神村田子倉方面

シロナメツムタケ	センボンイチメガサ
× クサハツ	ソウメンタケ ◎
キイロガサ	キソウメンタケ
エセオリミキ	ホウライタケ
× ベニタケ ◎	ハタシメジ
× シラタマタケ	オシロイタケ ◎
ベニナギナタタケ	チャナメツムタケ ◎
ナギナタタケ ◎	スギタケ
ウズチチタケ ◎	× ヒトヨタケ
サクラタケ	サマツモドキ
フウセンタケ ◎	スギヒラタケ ◎
アシグロ ◎	カノシタ ◎
ホテイシメジ	キクラゲ
× アカズキンタケ	クリフウセンタケ ◎
× ニガクリタケ ◎	スッポンタケ ◎
スギエダタケ ◎	コガネフウセンタケ
チシオタケ	アワタケ
キツネノチャブクロ	ウラベニホテイシメジ
× クサウラベニタケ	アブラシメジ
× テングタケ	ムラサキフウセンタケ
ハナビラニカワタケ	× オオワライタケ
ツエタケ	ホウキタケ
ナラタケ	ハチノスタケ
カワラタケ	シロアンズタケ
サクラタケ	
スミソメシメジ	
カバイロツルタケ	
× カラスタケ	◎は10日、15日の両日に観察されたもの ×は毒

伝えたい定正院の森

郡司哲三

共に行く雑木林や秋の声

あなたは広大な森の生命に触れたことがありますか。また、小さな草花と語り合ったことがありますか。ゆっくり歩きふと立ち止まって、あなたの廻りを見渡してみましょう。鳥の鳴き声や山川の音が耳に聞こえてくることでしょう。

身の廻りには多くの生物が生育していますが、どんな生物も人の生活と結びついています。潤いある生活を送っていくためには、こうした生物を守つていくことが必要なのです。

定正院の森は昭和六十三年一月十八日、県自然環境保全審議会で、県の緑地環境保全地域に指定されました。境内〇・七八ヘクタールにはコナラ、ホウノキを中心、ブナの木が群生しています。特にブナは直径一メートル、樹高二十六メートル、樹令二百年以上と推定されるもの二本と、他直径五十センチメートル、樹高二十メートルのものが数本あります。今ではほとんど姿を消してしまった中越地方低地（標高四十八～六十五メートル）のブナ自然林を知る手掛かりとして、学術的価値の高いものなのです。

自然に親しみ自然のしくみや、自然と人とのかかわりを学び、自然保護に力を入れ、大切な自然を永遠に子孫に伝える責務を感じています。

趣味

相田ハツイ

貴方の趣味はなんですか。よく尋ねられます。すかさず「食べる事よ」相手の方は絶句した様な顔をなされます。子供の頃からなんでもおいしくスリムを自慢しておりましたが、最近運動不足の為、すごい体重増加で悩んでおります。山野草の会は、私にとって有難いテストパターンです。一寸登りになると息はハアハア、心臓はドキドキ。

去年の栗島行きの時は都合が悪くて、行けませんでした。皆さん、相田さん行けなくて正解よ。貴方に無理だったわよ。これお土産よ。旅館の御膳についた袋入りのイカの塩辛。天然のブドウ酒。ハマナスの実を拾って作ってくれたハマナス酒。おいしくて三杯、九杯して頂きました。糸魚川の蓮華温泉に行きました時は、先頭組に入つて付いて行けたのに、なんで急に体力が落ちたのかしら。やはり運動不足のせいだわ。寝室を二階に移動しようから。一日に何回も階段を上り下りして、足腰を鍛えて、今一度スリムになりました。皆様何かよい方法が御座いましたら何卒教えてください。そして来年はスイスイ山のおいしい空気を存分に吸つて、木の芽の天ぷら、うどんの天ぷら、木の芽の花のおひたし、考えるだけで胸が一ぱいで。向寒の折どうか皆様も健康に留意なされ、春にお会い出来る日を楽しみしております。

木枯らしと雪割草

品田千枝

夕べからの季節風に

裏のから松の木々や紅葉は
黄色の衣を吹きとばしてしまった
すっかり裸になった木々は
お互に肌を寄せ合って

寒い寒いと震えていた

午後からは 風と雨が更に強くなり

地鳴のような音を立てて
野山を荒れ狂う

大木は足をふん張ってジット耐える
生まれたばかりの小枝は
ヒーヒーと泣きながら
身を曲げている

やがて日が沈み 風が止んだ
ああ よかった
それぞれの木々は安心した
この風が秋の終りであることを
木々たちは知っていた
そして 根雪が近いことを

ああああああああああああああ
山の雪割草は
どうして いるだろう
雪の下で じっとして
眠っているであろう
来年も 又行きたい
あのきれいな お花畠に。

初冬の海浜植物

品田博道

めずらしく穏やかに晴れた十一月最後の日曜日、やわらかな光に誘われて荒浜砂丘に遊んだ。

夏の若者達のエネルギーに満ちていた風景とは別世界で、防寒具に身を固めた中年男達が防波堤の上で押し黙つて釣糸を垂れている。

風は和いでいるのに海のうねりは冬の日本海そのものである。朝陽に輝く米山と、光る雲の向うにかすむ佐渡を眺望し、ふと目を足下にうつすと、汀線近くのコウボウムギが根本だけ緑を残して、枯葉を西から東にきれいに並べている。西からの卓越風が海浜の植物を整然と方向づけていく。

流木のすき間に病葉のように縮んだハマニガナが半分砂に埋っている。チガヤ、ケカモノハシ、ウンランも褐色の世界で心が沈む。そんな気持ちで堆砂柵を越えると風の弱い東側に、生きているぞと青々としたハマエンドウのかたまりが目に入りほっとする。荒涼とした中のオアシスである。アキグミもハマゴウも虚飾を脱ぎ去つて棒になっている。その脇にアレチマツヨイグサがロゼット状になり、クロマツも葉の一本一本を硬くして冬に身構えている。

海辺の植物それぞれが、高村光太郎の詩のように、「冬よ僕に來い」と宣言しているようだ。

家族で山野草を

脇屋ミヨシ

植物、山野草、自然、大好きなものばかりである。中でも草花が、大好きで、今年は、露草を大分増やして、家人に、随分邪魔にされた。さすがに私も、物好きと、近所の手前、恥かしいと思いながらも、でもとうとう秋まで一人眺めてはたのしんだ。それから大好きなものは、溝蕎麦がある。これは毎年のように、柿川へ見に行きたいもの一つだ。しかし、物笑いにされるようで、誰にも言つた事はない。

いつも通る線路ぞいの道路で、草花など、時には立止つて眺める事もしばしば。しかし、そのはとんどが、名前も名称も、知らないのである。難かしい事はともかくとして、せめて名称だけでもわかれれば、いっそうたのしいのに、と思う。

先日テレビを見ていた息子が「今度

家でも、春になつたら山へ行ってテンプラを揚げて食べようよ。油など用意して行けば出来るわけだから、お母さんも少しは山野草の事を知っているだろうからね」私は内心よろこんだ。何故なら、前々から息子達に、自然や植物に、関心を持つて貰いたいと、願っていたから、機会到来。習つたばかりの知識をフルに活用して、今度は、家人に受け売り出来る、と。出来得ればゆくゆくは、若い者が「山野草をたずねる会」に入会してくれれば、と私の夢は広がるのです。

このごろの自分

小幡和雄

今年の四月から山間地に転勤となり、単身赴任をしています。そのせいか、前よりいつそう自然への親しみが増しております。キツツキが住宅をつくるものすごい音で目をさましたり、夜、道でタヌキにすれちがつたりというぐあいで、とても楽しいです。

ところで、今年になって特に変わってきたと思うのは、自分が草花を育てることが大変好きになったことです。ちょっと今まで、市場で植木などを

見るのが好きで時々鉢物を買ってくるのですが、花が終ればすぐに枯らしてしまうことあります。ところが、今年から、いろいろな育て方のコツを知るようになってきたがぜん草花栽培が好きになつてきました。

シクラメンの夏越し、ペチュニアのさし木、ゼラニウムのふやし方等々、教えてもらった通りにやると、ちゃんと生き生きと育ってくれるのです。それを見るとますます好きになつてしまします。山野草の会で山の中で見つけたシュンランもだいぶふえて株分けもしました。

このように植物に親しむと生活も楽しくなってきます。将来退職したら草花に囲まれたコーヒー店の主人にでもなれたら最高だなあとこのごろ夢を持っています。

思いつくままに

吉田千恵子

今年は夏の研修が出来なくて、話題のポイントを見出せず、思いつくままにペンを走らせる事に致しました。

卯月は二日、石部神社の参道脇に咲いていたピンクがかかった紫色のハマダイコンを摘み、必死に登った（本人は少なくともそう思っているのです。）城跡では爽やかに搖風にほつとひと息つき、カタコの群れや、ハマナスソウのお嬢さを運んでくれる春の誘いに、素直に従うのも心楽しい事でした。

小雨降る神無月は校舎内で秋の味覚のコケ汁を戴く破目とはなりましたが、趣を異にしてこれ亦、美味しく戴く事が出来ました。午後からは北魚沼方面へ車を進め、木々から滴たり落ちる雨の零を気にしながら、山道沿の藪の中でスギエダタケ一種だけ（枯葉の中から茸を見つけ出すのは近眼の身には些か至難の業なのです。）手の平におさめ、我が家の味噌汁の実となり胃袋を訪問してくれました。

鬼灯の
衣も透けて
朱を増し

緑を恋う

池田保子

「あれ、木がない。」
今朝まであったニセアカシアの木が

切られ、無残に横たわっていた。

四月に転勤し、千秋が原を通つての朝、夕の通勤は、四季の変化がよくわかり、とても快適であった。しかし、除々にその景色が變つていて。トラックが土を運び、コンクリートの柱が打ち込まれ、小川が消され、雑草がうめられていく。そして、石ころの下のコオロギや、葉の上に止まっていたバッタの姿がなくなり、ミミズやカタツムリがみんな死んでいた。夕方、ねぐらにかえる鳥は、どこへ飛んでいくのでしょうか。かつては、こんもりと繁っていた信濃川左岸の林が、今は石ころの原っぱです。

動植物の生命を代償にして私たち人間の便利な快適な生活が成り立つていいのでしょう。足元の長岡の自然だけでなく、紙のムダ使いによる東南アジアの原生林の破壊と被害については、マス・コミの報道で知らされている通りです。

水も電気も石油も、生活に欠かすことのできないエネルギーですが、それらは、多くの代償の上に成り立つているものでしょう。緑の木や林がなくなつたら、空気でさえ生産されません。次代の子ども達にも、美しい緑いっぱいの地球を引き継ぎたいと思います。

編集後記

「かしのみ」第四号が皆様のご協力でできあがりました。活動のあととして内容豊かに発行することができました。（池田・藤田）